

「世界神学」としての天理教学

近年、「世界哲学」「世界歴史」「グローバル・ヒストリー」などの語が、人文社会学におけるある種のトレンドとなっている。また、ユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』(A Brief History of Humankind, 日本語では2巻本で出版)は、地球誕生から人類史を捉える書物として日本でも人気を博している。物事を地球規模で見直そうという試みについては、それが真に成功しているかはともかく意義ある試みであろう。

「陽気ぐらし」や「世界たすけ」を目指す天理教は、こうした言葉を掲げている以上、地球規模・世界レベルで物事を捉える視野が必要である。「論達第四号」(立教185年[2022]10月発布)と同月に発行された『みちのとも』では、「教学研究の扉」というシリーズが始まった。その〈第一考〉は、橋本武人「元初まりの話 人類の未来へ向けての『救済の歴史』」であった。元初まりの話は、親神天理王命による人間世界創造のプロセスが記されている。人間の成人を守護し文化の発達へ導いていくなかで、陽気ぐらし世界を進めていくうえでの人間の本来的なあり方が教えられている。橋本の論攷は、親神による人間の「救済の歴史」として元初まりの話を考察しており、「世界神学」としての天理教学の位置づけを論じようとしたという意味で、高く評価されるべきである。

これまで、天理教が現代世界のなかで果たす役割について、天理教内でも盛んに論じられてきた。これらの議論は、おそらく例外なく現代的状況を踏まえたものとなっているだろう。変化しない宗教は存在しない。いずれも時代に呼応しながら変化していくものである。同時に、これまで「世界宗教」(World Religion)と呼ばれてきた三大宗教—仏教・キリスト教・イスラーム—では、時代や地域に応じて変化する神学体系を有してきた。言い換えれば、これらの諸宗教が「世界宗教」と認知されるのは、(布教相手の文化を含む)諸環境に対応する教えを、教えの源となる聖典から汲み上げてきた結果として、現在(いま)を生きるうえで糧となる教えを、多くの人々に与えてきたからである。

教えを広め救済を進めるのを人間の身体で喩えるならば、身長が伸びるなかで身体を支えるには背骨の成長が不可欠である。天理教の文脈で言えば、教えの伸展を考えるうえでは天理教学という背骨が伸びていく必要があるのではないだろうか。

W・C・スミスとは

世界を意識した神学の構築について考察するために、2回に分けてW・C・スミス(Wilfred C. Smith, 1916～2000)の「世界神学」についての議論を取り上げたい。スミスは20世紀を代表する宗教学者の一人である。また、日本を代表するイスラーム研究者であった井筒俊彦(1914～1993)をカナダのマギル大学へ招聘した人物でもある。そして、ハーバード大学世界宗教研究所長を務めたりと、「宗教」をめぐる学問的状況の中心にいた人物である。1986年には、天理で開催された国際会議に参加するために天理を訪れた。

スミスはイスラームを長らく研究してきたが、日本語では『宗教の意味と終極』(The Meaning and End of Religion, 1963)や『現代イスラームの歴史』(Islam in Modern History, 1967)、そして

『世界神学をめざして—信仰と宗教学の対話』(Towards a World Theology: Faith and the Comparative History of Religion, 1981)が翻訳されている。同時代を生きたM・エリアーデ(Mircea Eliade, 1907～1986)は20世紀後半の宗教学を席捲し、日本の多くの研究者にももてはやされた。しかしながら、エリアーデの宗教学説には、1990年代以降に批判の嵐が吹いた。スミスの宗教学説はいわゆる「エリアーデ・ブーム」の陰に隠れ、日本の宗教学者たちには理解されてきたとは言えなかった。エリアーデ批判の裏返しでもあった「宗教」概念再考のなかで、スミスの議論は「宗教」概念再考についての議論を牽引したT・アサドやR・T・マッカチョンらによって評価された。こうした影響からか、先に挙げた邦訳書が2020年以降に2冊出版されて、スミス理解も少しずつ進みつつある。しかしながら、スミスの議論は彼の「宗教」論を含めて難解な点も多く、「宗教」を「〇〇教」のような宗教教団として捉える傾向にある人々に誤解されてきたように思われる。

宗教か信仰か

『世界神学をめざして』の副題は、“Faith and the Comparative History of Religion”と書かれている。日本語で直訳すると「信仰と比較宗教史」となるだろうか。「宗教学」という学問をどのように表現するかについて、研究者によってその表記は異なる。天理大学宗教学科の名称では“Religious Studies”が用いられているが、来年度にポーランドで開催される国際宗教学宗教史学会(International Association for the History of Religions, IAHR)では、“History of Religions”となっている。また、宗教学は「比較宗教学」(Comparative Study of Religion, Comparative Religion)とも呼ばれてきたが、この表現は宗教学が宗教の比較研究を通してなされるという理解に基づいている。

このように、各自の「宗教」理解を表現している表記であるが、スミスは単数の「宗教」で表記してきた。この理解の背景に、彼の「宗教」理解が介在している。彼は『宗教の意味と終極』のなかで、「宗教」という表現よりも「信仰」や「伝統」という表現を用いて宗教を理解するべきであると論じている。私たちは信仰に対する向き合い方がそれぞれ異なる。言い換えれば、各自が異なった信仰の輪郭を有しているとも言うことができる。このことは、「信仰は一名一人」としばしば表現されてきたところからも理解できよう。

スミスによれば、私たち各人の“信仰”が累積的に積み重なった結果として、私たちが認識する宗教教団があるという。同じキリスト教を信じていても、時代や場所で信仰者の理解が異なってきたことは言うまでもない。歴史的に、先人の信仰の上に私の神への信仰があり、その上に子や孫の世代に信仰が積み上げられていく。積み上げられた伝統のなかに私たちは立ち、信仰している。私たちが「宗教」と言ったとき、一人として同じ宗教の理解はない。あるのは誰かの「信仰」であり、その重なりとしての伝統である。それまでの伝統の上に立ちつつ、時代や状況のなかで新たな伝統が積み重なっていく。私たちの信仰は固定化された何かではなく、私たち自身の状況に応じて絶えず捉えなおされるのである。

[参考文献]

橋本武人「元初まりの話 人類の未来へ向けての『救済の歴史』」『みちのとも』(立教185年10月号)、2022年、22～29頁。